

第 66 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 銀賞

お茶の水女子大学附属中学校 2年

池上 高貴

課題 ①

あなたが考える国連加盟 70 年を迎えた日本の使命とこれから。

副題

「ノブレス・オブリージュ」

本文

① 「ノブレス・オブリージュ」

「僕はね、お友達のトゲを抜いているんだ。」

と話したら、母は驚いて、

「え？トゲ？」

「意地悪だったり、傷つく言葉をいう人の心のトゲを抜いているんだよ。」

「どうやって抜くの？」

と聞いてきたので、

「優しさで包んであげると抜けるんだよ。」

と教えてあげた。帰宅して今日一日学校であった出来事をおやつを食べながら話すのだが、母は一番に、先生からご注意があったかどうかを知りたがり、ないとわかると学校生活の話に関心をもって聞いてくれた。この小2から小3にかけてのトゲ抜き活動は、先生にも秘密だった。仲良しの友達も共感してくれ、仲間が増えていった。小さなトゲの持ち主なら一人で担当し、たくさんのトゲの持ち主には二人、三人がかりで取り組んだ。トゲが抜けた子が今度は抜く側になってくれた時は嬉しかった。母はトゲの方は順調なのかと見守ってくれていて、「北風と太陽」みたいだねと笑った。「北風と太陽」とは、北風と太陽が旅人の上着を脱がす勝負をする有名な物語だ。北風が強く吹けば吹くほど、旅人は上着を飛ばされまいとかえって強く押さえ、一方で太陽が暖かく照らすと、旅人は自ら上着を脱ぎだした。力で無理に動かそうとするより、相手が自ら動きたくるようにするほうが効果的だと教えてくれる。

「Dear Noble Chi Shang」と題するメールが僕に届いたことがある。宛先違いの迷惑メールだと思って母に報告した時、そう言えば半年前に漢字で選手登録をしたままだったことに気が付いた。迷惑メールではなく、僕の名前の「高貴」を翻訳したのだろう。この出来事から母に「高貴」は英語でNobleと訳されることや「noblesse oblige」（ノブレス・オブリージュ）という言葉を知ってもらった。調べてみると、フランス語で「高貴なものの使命（義務）」を意味し、ヨーロッパでは社会的に身分が高かったり成功した貴族は、社会の役に立つ使命や義務があるという考え方があった。今では貴族が負う義務の意味合いは弱まり、知識を独り占めせず教えることや、お金や時間に余裕のあ

る人が社会への活動や寄附に参加する形に変わって存続しているようだ。僕も自分の名前に誇りを持ち、社会に還元できるような人になりたいと思った。

僕はこの夏、日本の国際協力の現場を視察するJICA海外研修でベトナムへ行った。途上国とそこに住む人々の暮らしや文化を感じたり、ベトナムが抱える課題とJICAが取り組む国際協力や世界との繋がりを理解した。形式的な内容に留まらず、日本が相手国に寄り添うことで信頼が生まれ、文化や価値観の魅力で相手を惹きつける「ソフトパワー」や、武力や経済力で強制する「ハードパワー」が存在することなど、外交的な知識を教えてくれた。

国連は、国際の平和及び安全を維持することを目的とし、一国では解決できない問題について話し合い、協力するための「世界共通の場」としての機能が求められている。立ち振舞いからものの考え方まで、国連加盟70年を迎え信頼を築き上げてきた日本にはそれに相応しいかたちがあると思う。戦争や紛争など過去の過ちからの反省を次世代へと繋げていくことも忘れてはならない。国にはそれぞれの思惑があり、満場一致とはならず対立もある。同じ考え方の仲間を増やし正しいと押し切る強引な説得では関係が悪化するばかりだろう。僕は誰かが得をして、誰かが損をするのではなく、各国の立場からバランスのとれた妥協点を見付けることが大事だと信じている。厳しさよりも優しさは人や国を変える力があると信じている。強さから説得するのではなく、穏やかな外交的な対話こそが解決への近道だと思う。